

The background of the cover is a painting in a reddish-brown, almost monochromatic style. It depicts a close-up of a woman's face, tilted back, with her eyes looking upwards. Her mouth is slightly open, and a diagonal beam of light, transitioning from blue at the top to white at the bottom, cuts across her face. In the lower portion of the image, there are dark, silhouetted shapes that resemble evergreen trees against the reddish background.

死の霧の伝説 小林久三

角川文



昭和五十二年十月三十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

しきり でんせつ
死の霧の伝説



著者

小林久三
こばやし きゅうぞう

発行者

角川春樹

印刷者

橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式会社
角川書店
①一〇二〇東京③一九五二〇八

電話東京(265)五二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

新興印刷・多摩文庫

0193-143804-0946(0)

死の霧の伝説

小林久三



角川文庫

3981

霧の奥に黒い影のようなものがぼんやりうかんだ。

影のようなものは、ぐんぐんこちらに向かって突き進んでくる。それもひとつではなかった。乳白色の霧の奥から黒い影はひとつ、ふたつ……またひとつ……と、数を増してくるようだった。黒い影のあとには、いくつもの数がつながっているらしい。先頭の影が、こちらに向かって、接近するたびに、背後につづいた黒い影は、その幅と厚みを加えてくる。なにか黒い集塊が、驚くべき速さで、こちらに向けて突進してくる。それは、走るというよりも飛んでくるという感じだった。

へなんだろう

小仲広は、フロントガラスの先に目を凝らした。視界を淡い霧が流れている。ヘッドライトが照し出す黄色い光芒の先は、霧に溶けこんで見通しがきかない。

右側は岩が鋭くえぐれた、深い谷である。

谷底からは、やや蒼味を帯びた不気味な霧が湧きあがってきて、一車線の砂利道によんだように低く這いまわっている。

黒い集塊は、よんだ霧を引き裂くようにして、こちらに突進してくるのだ。その集塊は、さ

らに幅と厚みを増したようだった。道路いっぱいにはひろがり、背後に延々とつながっているようにみえる。異様な集塊だった。

〈動物の群れか〉

小仲は前方を注視したまま、独り言のように呟いた。

車のスピードを落とした。ハンドルを両手でにぎり、姿勢を前後させると、フロントガラス越しに異様な集塊を見究めようとした。

先頭を疾駆する黒い影が、ズーム・アップするように、小仲の目にとびこんできた。黒い動物だった。暗灰色の目が、傲然と光っている。

〈おおかみ
狼か〉

とっさに小仲はそうおもった。だが、S県の山中にオオカミが棲息している話をきいたことがない。はっきりした記憶ではないが、オオカミは国内ではすでに絶滅しているはずではないか。動物との距離が、いつそう縮まった。ヘッドライトの光芒のなかに、その動物は躍りこんできた。

〈犬だ！〉

小仲は頭のなかで低く叫んだ。犬……それも野犬だ。霧を裂いて走る野犬の群れ。

一群をひきいたように走る先頭の犬は、車のヘッドライトを浴びても、一向におびえた様子ではなかった。脇に飛んで車をよけようともせず、驚いて後退するわけでもなく、そのまま車に向か

って直進してくる。このままでは、犬を撥ねるのはあきらかだった。

反射的に、小仲はブレーキを踏んだ。

足のうらに鈍い衝撃をのこして、車は停止した。

先頭の犬は、いきなりバンパーのうえにとびあがり、前肢をフロントガラスにかけ、車内の小仲をのぞきこんだ。

犬と目が合った。日本犬の雑種だった。

その目を見返したとき、小仲はぎくっとした。体長は一メートルくらいはあるだろう。全身、純黒の体毛におおわれている。頭を低くさげ、唸り声ひとつ発せず、こちらをみつめた目は、独得な光を帯びて光っている。

〈殺戮者の双眸だ〉

小仲の背筋を、戦慄が走った。飢えて狂暴化した野犬の群れが、突如、人間の匂いをかぎつけて、襲撃してきたのだろうか。エンジン音や、ガソリンの臭いに引きよせられて、この車に殺到してきたのか。

そうとしか考えられなかった。

いつのまにか、車の周囲は野犬の群れにとりかこまれた。霧のなかから、一頭、二頭、三頭と現われて、車を取りかこんだのだ。なかで体格のいい、悍猛な感じの野犬が二頭、バンパーのうえにとびのり、バンパーのうえをわがもの顔にうろつきまわりながら、鋭い目を運転席の小仲に

向けた。

屋根のうえにも、犬が二、三頭、とびのつたようである。動きまわる足音が、頭上でかすかにきこえた。

車の両側を、びっしりと犬が埋めた。何頭かの犬が前肢を車窓にかけて、内部をのぞきこんでいる。

小仲はおびえたように、視線を背後に向けた。後部も同じだった。リア・ウインドウにも、犬の光る目が貼りついている。そして、餌に群らがるように車の周囲を徘徊する犬。

その数は、ゆうに数十頭を数えるだろう。

野犬たちは、あきらかに車内にもぐりこもうとしているようだった。狂ったように前肢で車窓を叩き、隙間に鼻面を突っこんで、こじあけようと計っている。文字どおり、黒塗りの国産中型のブルースカイの小仲の車の四囲は、異様な野犬の一団に包囲された。

鋼鉄とガラスのなかにいる獲物に、彼ら野犬は、あきらかに苛らだちはじめた様子である。彼らは、すさまじい唸り声を発した。双眸を爛々と光らせ、歯をむき出しにして、赤い舌を押し出すように低い唸り声をあげる。数十頭の犬があげる不気味な唸り声が、車内に充満し、耳を圧した。

〈どうするか〉

小仲は寒気を覚えた。扉は完全にロックしてある。窓も締まっている。野犬に車内に侵入され

る怖れはない。一時のショックが醒め、その判断がうまれたとき、彼はわずかに余裕をとりもどした。

へこの光景を、カメラにおさめておけ

頭の隅に、職業意識が目覚めた。光量がたりないが、とにかくこの野犬の集団をフィルムに記録しておこう。視聴者の興味をひく、面白いニュースになるかもしれない。

へ裏日本のS県の山中で、ドライバーを襲う兇暴な野犬の集団……

そんなニュースのテロップの文字が、頭の奥にネオンのように点滅しながら、流れた。

小仲は素早く、助手席においた鞆かばんのなかから、アイモをとり出した。携帯用の十六ミリの撮影機だ。東京の第七チャンネル、東和テレビ報道部のカメラマンの彼は、どこへいくにも車内にアイモをほりこんでおく。ニュースカメラマンとしての習性がそうさせるのだが、十日間の有給休暇をとり、車を駆って、山陰のS県の山間のちいさな町に帰った羽柴真紀をたずねるため、北千住のアパートを出たときにも、フィルムを装填したアイモを車内に積みこんでおいた。

五年ぶりにとった有給休暇である。突然、彼のもとを去って、郷里の山陰に帰っていった女を追いかけていこうとしているのだ。羽柴真紀が、なぜ、不意に東京の生活を切りあげて、帰郷したのか。その謎を知るために、有給休暇をみとめようとしないうデスクの酒井幸明の反対を押し切って、旅に出たのだ。カメラのファインダーから、なまぐさい事件をフィルムにおさめるといふ毎日の生活とはぶつかりと縁を切って、ひたすら彼女のことだけを考えて、山陰に向かおうと

おもった。

ハイエナのように事件の腐臭を嗅ぎまわりそれをフィルムにおさめる仕事をつづけていると、なにか薄汚れたものが、からだの芯にまでこびりついて離れないような気がする。東和テレビの報道部に入社してから、すでに七年はたっている。そのかんに、薄汚れたものが、からだの奥深いところに沈澱し、沈澱したのは、じわじわと皮膚をとおしてにじみ出してきたのではないか。三十歳に近づいた小仲広は、自分がいまひどく薄汚れてしまったようにおもえた。事件の奥行きを深く考えようとはせず、ただ表面的に事件の上っ面だけをフィルムに写しとる。妻子をもつ愛人をバラバラにナイフで切り刻んだ二十二歳のO・Lが逮捕される瞬間、深夜のラブ・ホテルの火事で、パンツ一枚で逃げ惑う禿げ頭の男と女子高校生のカップルの姿、そして、業者から半強制的に集めたワイロで豪勢な邸宅に住む汚職官吏が、検察庁の車で出頭をもとめられる光景。

それをフィルムにおさめ、ニュースの時間に、わずか一、二分、ブラウン管に映し出されればそれで終わりだった。あくる日には、ふたたび、新たな事件をもとめて、走りまわる。事件というのは、人間が放つ腐臭のようなものだが、腐臭だけを嗅ぎまわる生活をつづけければ、その腐臭が小仲自身の内部にしみこみ、こびりついてしまうのは当然だった。羽柴真紀が、彼のもとを去ったのも、そんな自分の薄汚れたものに耐えられなくなってしまったためではないか。

できるなら、こんどの「旅行」に、撮影機だけはもっていきたくなかった。だが、駄目だった。なかば無意識のうちに、撮影機を車内に積みこんでしまった。だが、その反面、こんどの旅行に

は、なにかが起こるような予感がした。誇張していえば、自分の一生を決定づけるような出来事が起こるような、そんな奇妙な予感がしたのも事実だった。

運転席に腰を降ろしたまま、小仲は、両手にアイモをかかえ、ファインダーをのぞきながら、フロントガラスにまつわりついた野犬の姿をとらえようとした。バンパーにとびのった二頭の野犬は、おそらく彼らのリーダー格だろう。

レンズに、兇暴に光る黒い野犬の眸ひとみが拡大されて映った。精巧なレンズにとらえられたその眸は、肉眼でみるよりも、はるかに異様で狂的な光を帯びているようにみえた。追いつめて、死にもの狂いでなにかにすがりつこうとする手負いの獣のそれのような、兇暴な色が目にうかんでいく。

へ飢えきっているのか

それとも、それ以外のなにかの事件で、人間に異常な復讐心ふくしゅうしんを抱いているのか。

そう考えながら、小仲はアイモのスイッチを押した。

そのとき、黒い野犬の姿が、不意にカメラのフレームからはずれた。

異様な出来事が起こったのは、次の瞬間だった。

2

リーダー格らしい黒い野犬は、二、三步後ずさりし、低く上体を沈めた。腰は落ちていない。

〈襲撃の姿勢だ〉

小仲はそう直感して、からだをやや斜めにずらせると、身構える姿勢をとった。

そのとき、黒い野犬はいきなり宙に躍りあがった。全身を荒くスイングさせると、前肢をそろえ、フロントガラスにとびかかってきた。宙でそろえられた前肢は、二本の金属の棒かなにかのように、小仲の目にみえた。

二本の金属の棒は、フロントガラスに突き刺さるようにならびた。

ガシッ！ と、鈍い音がした。

ガラスに阻まれて、二本の棒は虚しく弾き返された。だが、リーダー格の野犬は、ひるまなかつた。体勢を整えると、再度、フロントガラスに襲いかかった。前肢に全体重をかけ、からだごとぶつかってくるような凄まじい勢いだった。

驚くべきことが起こった。

リーダー格の黒い野犬の動きにつられたように、車をかこんだ野犬の群れがいっせいに、車に襲いかかりはじめたのだ。下肢に跳躍力を溜め、獲物を噛み倒すような勢いで、車に体当たりしてくる。前後左右のガラス窓に向かって、次つぎに間断ない攻撃を仕掛けてくるのだ。それは、まさに「黒い礫」の十字砲火を浴びたようなものだった。

周囲にカメラをふりまわしながら、小仲はしだいに慄然とした。人間の集団が、恐怖や不安にとり惑かれたとき、突然狂いはじめ、異様な行動をとることを集団発狂というが、いま、執拗

に彼の車を襲いはじめた野犬の群れは、まさに「飢えた狂犬の集団」としかいいようがない。

へなにが彼らを、こう狂わせたのか

小仲は一瞬、奇怪な夢魔の世界に引きずりこまれたような錯覚にみまわれた。

霧はしだいに濃くなってくるようだった。

小仲はダッシュボードの時計をみた。午後一時半をちょっと過ぎたばかりだ。霧に閉ざされて、あたりは薄暗く、視界は暗くなっている。数十頭の野犬は、霧のなかから湧き出たように現われ、ガラスに体当たりを喰わせては、霧に溶ける。

小仲は、ある映画のシーンをおもい出した。ヒッチコック監督の「鳥」。その映画のなかで、人間と共棲きようせいしていた鳥が、ある日、突然、人間を襲い出す。無数の鳥たちが、狂ったように人間を狙ねらいはじめ、次つぎに餌食えじきにしていく。鳥の襲撃におびえた人間が、家のなかに逃げこみ、扉を締め、窓ガラスを閉じても効果がなかった。鳥たちは、扉を鋭いクチバシで突き破り、窓ガラスを全身で叩き壊して部屋に侵入し、室内の人間の目を狙い、目をやられて動きを失った連中の肉をついばみはじめる。

鳥の集団が、なぜ人間を襲い出したのか。映画では、なんの説明もされていない。解釈も加えられていない。さまざまな想像が可能だけに、逆に不気味だった。猛禽もうきんではなく、鳥カゴにベツトとして飼われているような鳥が、一個の兇器と化して、人間の眼球に突き刺さっていったショットを、小仲はいまも、ある種の恐怖感とともに、なまなましく記憶している。

いま、小仲の車に波状攻撃をかけてくる野犬の群れも、映画のなかの不気味な鳥と同じだった。小型な鳥とちがって、野犬の図体は大きい。野犬として、山林を放浪していただけに動物的な本能が鋭くなっているのだろう。人間にたいして敵意や悪意を抱いているのかもしれない。

危険度は、野性の獣たちに包囲されたのと同じだった。子犬はいない。老犬もまたみあたらなかった。すべて、屈強な成犬ばかりのようである。黒、黒と白のブチ、赤毛、褐色、体毛がそれぞれがっている。種類も、日本犬、シェパードなど、種々雑多のようだが、なかにまじった犢^{こし}ほどの大きさの犬が、全身の毛を逆だてて、荒い息を吐きながら、車窓に体当たりしてくるさまに、小仲は悪寒^{おかん}のようなものを感じた。

「なにが起こったのだ？」

と、小仲は独り言を呟^{つぶや}いた。呟いたあと、唇^{くちびる}の端がこきざみに震えた。

へどうするか

のんきにカメラを車外に向けている場合ではなかった。

車を発進させるべきだ、という判断がうまれた。逃げるべきだ。この霧のなかで、スピードはあげられない。野犬の群れは、当然、車を追ってくるだろう。彼らの追尾をふりきれるほどのスピードが出せないが、このまま停車させて、彼らの襲撃を放置しておけば、彼らはいつか車窓を突き破って、車内に躍りこんでくるにちがいない。一頭や二頭なら、闘える自信があった。だが、彼らは数十頭もいるのだった。瞬時に噛み殺されるだろう。

飢えた彼らの餌食になることは、火をみるよりもあきらかだ。

小仲は、アイモを元の位置にもどすと、アクセルを踏もうとした、そのときだった。

耳もとで、ガラスがバシッと破れる音がした。反射的に、音の方向をみた。

すぐ目の前に、兇暴な野犬の顔があった。

割れたのは、運転席すぐ横の窓だった。割れた瞬間に、無数のガラスの細片が野犬の顔面に埋めこまれたようだった。凄まじい悲鳴とともに、鮮血が野犬の顔から噴水のように噴きあがった。それでも、その野犬は逃げ去ろうとしなかった。前肢を車内に突っこみ、後肢を跳ねあげ、全身をねじるようにして車内にはいりこもうとしている。異様な光りを帯びたその双眸からは、むき出しの敵意が放射しているようにみえた。

「くそっ！」

小仲は唸った。

危険を察知すると同時に、彼の体内から激しい闘志のようなものが湧きあがった。

小仲はやにわに床に落ちていたスパナを拾いあげると、野犬の前頭部めがけてふり降ろした。

スパナは、窓ガラスを叩き割ると同時に、正確に野犬の前頭部に命中した。ガラスの細片が、火花のように散乱するとともに、野犬はグェッ！と唸り声をあげて、車外に仰向けに落ちた。

野犬の前肢で破られた車窓は、スパナの一撃をうけて、さらに空間がひろがった。野犬が車内にとびこむための、格好の目標ができた。野犬がそこを狙い討ちしてくることはあきらかだった。

「車を走らせるんだ！」

小仲は自分にそう命じた。

片手でハンドルをにぎったまま、車を発進させた。あいた手には、スパナをにぎりしめている。破れた車窓から野犬が侵入しようとしたとき、容赦のない一撃を加えるつもりだった。

車は走りはじめた。

谷底から湧きあがる霧はますます濃くなりはじめた。乳白色からしだいに濃度を増し、鉛色の霧に変わった。視界はほとんどきかない。視界ゼロに近い状態で、片手運転は危険このうえない。時速、わずか二十キロにすぎない。

野犬の群れは、のろのろと走りつづける車を追いはじめた。敏捷な野犬にとって、それは追うというよりも、車の移動につれて、車の周囲を徘徊徘徊していると同じだった。

予想したように、野犬は、破れた車窓を狙いはじめた。相変わらず反対側の車窓やリア・ウィンドウに体当たりをくわせている一群がいたが、大半は運転席に近い車窓のところに集結しはじめた。

バンパーの上に乗っていたリーダー格の黒い犬が、路上にとび降り、運転席に近い車窓に接近してきた。リーダー格は、この車窓を突破口にして、車内への闖入かんちゅうを計ろうと計算したようだった。

小仲は全身が急速に冷えるのを感じた。ハンドルをにぎった手が汗ばんでくる。スパナをもつ

た手が、かすかに震えた。

へスピードをあげて、こいつらをふり切るべきかへ

左手は急峻な岩壁がそびえ、右手は底知れぬ谷が深まっている。道路は崖ぞいに果てしない迂回を重ねているはずである。視界を霧につつまれた状態のなかで、スピードをあげることは、自殺行為にちかい無謀運転であった。本来なら、車をとめ、霧が晴れるのを待つべきなのである。スピードをあげるにしても、三十キロが限度だろう。

へそれにしてもへ

と、小仲はおもった。ほかの車の影がいつさいみえないのが、ふしぎだ。午前十時に旅館を出発して、この林道にはいった。目的地のS県赤座町に行くには、伯耆山脈の鳥取西部よりをS県に向かつてつらぬいて走る、スーパー林道と呼ばれる、地図にも記載されていないこの道路が最短距離のはずであった。車で四時間ほどの距離である。昨夜とまった鳥取市の旅館の主人にそう教えられて、林道にはいつてすでに三時間以上になるが後続車はおろか、対向車の影すらみえない。

道に迷ったはずはなかった。旅館の主人が書いてくれた地図のとおりに走っている。

へどこかで崩落事故でも起こったのかへ

危険防止のために道路が封鎖されたのだろうか、と小仲は考えた。

そう考えているあいだにも、野犬の群れは執拗に車のまわりにまつわりついた。なかで、リー